

教会の暦では、1月6日までがクリスマスの期間となっています。それ故、1月1日に教会のなかで見られるクリスマス飾りは、日本においては世間のお正月モードとの「ずれ」を感じさせます。また、教会の1年は、基本的にアドヴェントあるいはクリスマスから始まりますので、ここでも世間との「ずれ」が生じています。教会は、イエスのご生涯に合わせて1年の暦を刻んでいきますが、その中で生じてくる世の暦との「ずれ」は、人間の計画に合わせて刻まれていく時と神の導きのなかで刻まれていく時との「ずれ」をも象徴しているように感じます。そして、この「ずれ」の中にこそ、私達人間にとっての救いが秘められていることを聖書は教えてくれています。「わたしの思いは、あなたたちの思いとは異なり、わたしの道はあなたたちの道と異なると主は言われる。天が地を高く超えているように、わたしの道は、あなたたちの道を、わたしの思いは、あなたたちの思いを、高く超えている」（イザヤ書 55：8～9）。

本日の箇所には、東方から来た占星術の学者達が、星に導かれて幼子イエスに出会う物語が記されています。彼らはその星に関する知識から、新たに「ユダヤ人の王」が誕生したという答えを導き出し、ユダヤを治めるヘロデ王がいるエルサレムを訪ねます。しかし、そこに「ユダヤ人の王」はいませんでした。ユダヤの祭司長や律法学者達から、聖書には救い主の誕生する場所がベツレヘムであると預言されていることを知った学者達は、軌道修整して出発し直すこととなります。とは言え、ベツレヘムの何丁目何番地なのか、具体的なことは分かりません。そんな時、彼らが東方で見た星が「先立って進み」、救い主イエスのもとへと導いていきます。彼らが、自分達の星に関する知識から答えを導き出したエルサレムに救いはなく、思いもしなかったところにそれはありました。自分達が見出した答えと星自身が導き出した答えとの「ずれ」…そのなかに彼らは満ち溢れるほどの「喜び」を発見していきます。彼らが、時の権力者ヘロデ王が前もって計画していた道ではなく、神の示された「別の道」を通して帰っていったという記述は象徴的です。

「苦しみによって苦しみから救われ、悲しみの穴をほじくっていたら喜びが出てきた。…生きているって、おもしろいと思う」（星野富弘）。このような神と私達の認識との間に生じる「ずれ」があります。「神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終わりまで見極めることはできない」（口語訳、伝道の書 3:11）。占星術の学者達を導いた星は、今もなお私達を導いてくれています。

（文責：望月達朗牧師）

